

- 問い合わせ 中央公民館  
TEL 32-1132 FAX 37-1153
- 編集 公民館報編集委員会
- 印刷 株式会社プラルト

発行  
2022  
9/30

# 公民館報 まつもと

表紙の説明は6面



シリーズ デジタル化 第4回

公民館報のデジタル化のこれから

公民館報は現在スマホでも閲覧できます。しかし今推進されているデジタル化はこれだけにとどまりません。では、今後何が求められるのでしょうか。「スマホ体験講習会」にそのヒントを探ってみました。

好評の講習会

松本市は昨年好評だった「スマホ体験講座」に続き、今年度は「スマホ体験講習会」を実施しています。

8月19日までに5会場で実施され、45人が参加しました。評価は上々で、アンケートの「(講習会を)家族や友人に勧めたい程度は」という設問に、80%以上が10点満点の回答をしています。また参加者の95%が60代以上で、80代以上は20%強です。

カリキュラムは、基本的な使用方法のほか、二次元コード、地図、キャッシュレスなど、事前アンケートを参考に、その会場ごとに準備されます。



閲覧できる公民館報と二次元コード

また運営するのは業務委託された民間の事業者です。



スクリーンも活用して分かりやすく

講習会の実際

8月12日午前10時より、今年度4回目が鎌田地区公民館において開かれました。参加者は10人で、女性5人、男性5人です。70代以上は7人でした。スマホを持っている人は6人で、その方たちの参加

の動機は「より使いこなしたいから」というものです。

内容は、音声入力や二次元コードの利用など、複雑な入力を回避することに重点が置かれていたことが印象的でした。講師スタッフは2人で、利用経験者でさえ改めて発見する事柄もあり、分かりやすい講習でした。

参加者の感想は、「次回も受けたい」「もっと勉強したい」「いろいろな用途に使ってみたい」など、これからの利用拡大を予感させるものがありました。



個別の相談にも対応

スマホのデジタル化

今後は館報にアクセスすることに何かしらの有益性が要求されるでしょう。またスキルを持った専門家の援助も必要です。この講習会のように、推進者、参加者、協力者がマッチした姿が館報の編集にも求められることでしょう。

わがまち自慢(第二地区)

3年ぶりの舞台奉納―天神祭り―

松本の大きな伝統行事の一つ「深志神社天神祭り」が、7月24日・25日に行われました。コロナ禍で2年間は神事のみだった祭りは、急激な第7波拡大を受け、慎重に感染対策を行い実施されました。

舞台町会と協議のうえ、今年は漆塗りの豪華な舞台15台(市重要有形民俗文化財)がそろって奉納されると、境内は活気づき参拝客で賑わいました。

25日の夕刻には、町内に舞台庫がある本町5丁目の舞台はお囃子の音とともに街中をえい行しました。深志神社の創建は古く、江戸時代にはお城と城下町の総鎮守として歴代城主からも敬われました。「天神祭り」は城主小笠原忠真が南深志の町内に舞台を造らせたことから始まる(1615年)と伝えられます。町人の心意気を競いあつて制作してきた舞台は、信州一の商都松本の繁栄の象徴でもあります。



〈舞台の復活で賑わう境内 2022.7.25 撮影〉

城主水野忠直から寄進された二基の神輿(市重要文化財)も、信州松本松深会の担ぎ手により氏子町内巡りができました。

市街地の住民と子どもの減少は深刻で、舞台の曳手は町会ごと対策を行い、お囃子の子どもの教室は市全体から募るなどの課題はあります。

松本深志舞台保存会の石塚会長は「皆が協力しあつてできるだけの努力をし、舞台の奉納ができた。大切な伝統文化は継承し、松本のまちにのこしていきたい」と意気込みを話しました。



視点

⑧ 地域住民と学生がつながる  
芳川地区  
つくりきプロジェクト

若者と一緒に

芳川地区には、若者は地域との関わりが少ないという課題があります。若者の地域参画へのきっかけづくりに取り組むために、芳川地区地域づくりセンターが中心となって、昨年7月に芳川いきいきプロジェクトを立ち上げました。中学生、高校生、大学生にとっては自分の自由なアイデアを、若者が中心となって実現させることができる良い機会となっています。

写真でつづる  
まつもと今昔⑤9

～時代の流れにあわせて～



(撮影：1962年)

1935年に河童橋まで乗合バスが延伸し、上高地が身近な観光地となります。先代の稲核橋は、地域の交通基盤としても大活躍しました。



(撮影：2019年6月)

稲核ダム建設に伴い、現在の橋に架け替えられました。手前には先代の橋も並んで見られます。

※1962年撮影と同じ地点から。



ZOOMを用いたハイブリットな会議

これまでに、青空市、地域住民が災害の時にも役立てられる家族紹介カードづくり、小学生向けの『eスポーツ』体験会が実施されました。2カ月に一回開かれる会議では、遠方の学生や、電車の中から参加した学生もいました。発言しやすい空気があり、積極的な意見交換がされました。

地域住民との関わり

「人と関わるのが好きだから参加を決めた」と信州大学繊維学部の松浦結奈さんは話します。「去年の青空市でたくさんの人と交流できた。皆が楽しむ光景を見て、参加して良かったと感じた」と同学部の高崎照瑛さんは言います。青空市など、多くの地域住民と関わる機会は、大学ではなかなか得られません。

活動から地域課題へ

学生たちは、このプロジェクトを通して、地域に問題意識を持ちました。



昨年の青空市の企画運営をした学生たち

気軽に参加した活動から、地域の課題を考えるようになってきました。このプロジェクトの効果は重要と言えます。未だの松本を支えていく若者たちには、地域の課題を知るために、参加しやすい活動の機会を作ることが必要です。

おこひる

コロナ禍で山登りを自粛している。七十歳を過ぎてても山に登りたい。それには体力を維持しなくては。退職後近くのジムに通

い始め、四年数ヶ月になる。感染対策をしているジムに通えるのはありがたい▼以前肩をケガし手術した影響で、右腕はまっすぐ上にあがらなかった。ジムのパーソナルトレーニングで、徐々に改善してきた。完全には元に戻らないが、かなりあがるようになり嬉しい▼また、左ひざを痛めてクリニックで治療し、回復した。ところが自肅前、最後の山登りの時である。上高地の明神岳ひょうたん池を日帰り往復した。帰りのガレ場で左ひざをかばい、今度は右ひざを痛めてしまった。その後治ったものの、トレーニングが足りない▼高齢者と単独行の登山者の遭難が多い。遭難は誰もが起こしたくないと思っっているだろう。やはりしっかり体力をつけたい。山小屋での乾杯を楽しみに、トレーニングに励む日々である。山登りの仲間が足腰丈夫なうちに、コロナも落ち着いてほしいものである。



歴史探訪  
探ろう松本30  
白板地区

市街地北西部にある白板地区は、人口5,999人、3、041世帯です。65歳以上の人口比率は、29・5%です。14町会の規模は、最多の蟻ヶ崎西町会712世帯から最少の駒町27世帯までさまざまです。

白板地区の歴史は

城山腰と呼ばれる城山のなだらかな斜面には、多くの遺構が見られます。

地区内には女鳥羽川や奈良井川が流れ、稲作が盛んであったことや交通の要所であったこともうかがえます。

住居跡は宮測本村遺構の弥生時代竪穴住居Ⅱや蟻ヶ崎遺跡の奈良・平安時代の竪穴住居などが発掘されています。

遺物として開き松古墳の眉庇付冑や神社の畑から蝶形磐



加助の悲哀、貞享義民塚

(楽器) が出土しています。

白板地区、宮測地籍の初見は応永7年(1400年・松本市史による)で、蟻ヶ崎の地名は天文21年(1552年)に小笠原長時の建仁寺への請願文にみられます。

不当な年貢取立てを直訴した貞享騒動の、多田加助の義民塚もあります。

公民館の変遷

北部公民館は昭和56年(1981年)の22館整備計画で誕生し、のちに城北・安原が独立して白板地区が誕生しました。公民館の建物は平成27年(2015年)4月に城山の高台から、北松本駅より福祉ひろばから徒歩5分の位置に新築されました。

地域テキスト

平成26年12月、白板・波田・本郷の3地区が地域テキストのモデル地区となりました。

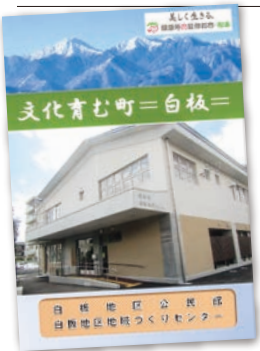


場所を移転した白板公民館

今後の課題

住民の高齢化や、高台に住する住民の、買い物などの移動困難なケースが増えており、支援が必要です。

折も折、翌年の白板公民館新館開館に間に合わせようと編集委員会を組織し、8カ月足らずで白板地区の歴史や町会・公民館活動・各種団体・施設などを記載した地域テキストが完成しました。約300部作成されたテキストは、地区内の小中学校などに配布され、活用されています。



モデル事業・地域テキスト

**松本平の野鳥たち**

ヤマガラ (2021.10 アルプス公園 写真提供:信州野鳥の会)  
スズメとほぼ同じ大きさ。カラ類の中では色彩豊かで、“腹部が山吹色のカラ”が名前の由来。全国に分布し、留鳥として繁殖。野鳥の中では余り人を恐れない鳥で観察しやすい。かつて、縁日で「おみくじ」を引いていた小鳥としても馴染みが深い。雑食性で昆虫やクモのほかに固い木の実(写真:エゴノキの実)が大好物。

**表紙について**

**今井ドンパン夏祭り**

コロナで中断していた今井ドンパン夏祭りが3年ぶりに開催されました。飲食の夜店・バンド演奏・盆踊りなどはありませんでしたが、夜店・太鼓演奏・打ち上げ花火が夜空を彩り、大勢の住民が楽しみました。

(撮影 2022.8.14 今井小学校校庭)